



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第46回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 打席を移ったのはなぜ?

1死二塁、左打者は2球を過ごし、カウントは「ボール1ストライク1」。ここで右打席へ移動。直後の3球目(判定は「ボール」)に二塁走者は三塁へ盗塁を試みるが、捕手からの送球でアウトになりました。それを見た打者は再び左打席に戻ります。最後は三振で攻守交代になりましたが…。

今夏の全国軟式野球選手権大会、高砂球場での一コマでした。規則 6・06(b)記載の通り、投手が投手板に触れる前なら「打席を移動する」ことの問題はなく、左右両打ちのスイッチヒッターでなくとも反対の打席に立つことを禁じる文言もありません。

でもこの場面ではいったい何のために左打者が右打席に移ったのでしょうか? 「二塁走者の盗塁に備えて捕手へプレッシャーをかけた。」というのは言い訳がましく聞こえます。盗塁を阻んだ捕手の好送球に大きな拍手がおきました。それは、どこかモヤモヤしたものが打ち消された「正義の瞬間」ではなかったでしょうか。

「打席」とは「バッタースボックス」の訳語です。つまりは「**打撃(バントも含む)のために定められた場所**」であるという原義を忘れてはなりません。

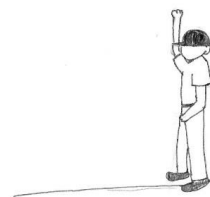
歴史的な延長 50 回の熱闘大会の中、少しのむなしさが残りました。

ルール編 ハーフスイングに対するリクエストの手順

右打者のハーフスイングに対するリクエストです。捕手が一塁を指差したので部員の塁審は右手を上げてスイングを支持しました。すぐに球審から注意を受けていたようです。何の指導でしょうか?

規則 9・02(c)【原注】には、「打者がハーフスイングをし、球審がストライク宣告をしなかったときに、守備側から塁審のアドバイスを求めるよう要請することができる」とあります。

- ①リクエストをする捕手は、打者を指差し、口頭で「スイング(します)」や「振った(てます)」と球審に要請する。
- ②それを受けて、球審は塁審に「チェックスイング(振ったか?)」とアドバイスを求める。
- ③そこで塁審は「スイング/アウトの要領で右手を挙げる」か「ノースイング/セーフの要領で両手を広げる」を伝える。



以上の手順でアドバイスを受けた球審は、改めて最終の判定を下します。プロ野球では球審に口頭でリクエストするよりも、いきなり塁審を指差すことで要請としているようです。それでも、球審から塁審にアドバイスを求める形は変わりなく、その後の流れは同じです。もちろんこの間はボールインプレイであることに注意してください。

以上の事柄は【**高校野球特別規則 25**】に規定されています。

練習試合などでは部員が審判を務めることもあるでしょう。しかし、誰が役目を担ってもマナーとルールは変わりありません。基本として高校野球では捕手が塁に向かって指さすことはありません。また、「駄目モト」のような明らかなケースなど、要請を受けずに注意・指導することがあります。

上記の球審は連盟の審判員でした。捕手にも部員の塁審にも基本を確認して試合を再開したのです。